

## 『保育園留学』を通じた地域活性化・超長期的な関係人口創出の取組

厚沢部町役場政策推進課政策推進係

### 1 厚沢部町の概要

北海道厚沢部町は、渡島半島の日本海側、檜山管内に位置し、三方を森林に囲まれ、清流厚沢部川をはじめとする河川流域には、水田や丘陵地帯に畑地が拓けた農林業を基幹産業とする町です。また、『メークイン発祥の地』として古くから農業の営みが続けられてきており、安全で安心な農産物づくりに取り組んでいます。

厚沢部町では、平成21年に『過疎』を受け入れた上で、魅力あるまちづくりを目指す『素敵な過疎のまちづくり』基本条例を制定し、誰もが厚沢部町に「住んで良かった」「住んでみたい」「いつまでも住み続けたい」と思える、安全で安心して暮らせる、個性豊かで活力に満ちたまちづくりに取り組んでいます。

### 2 保育園留学誕生まで

厚沢部町では、全道の中でも早い段階から、町が100%出資する『素敵な過疎づくり株式会社』を設立し『移住体験住宅』を活用した移住施策などを行い、人口増に向けて外部からの人を受け入れる取組を進めてきました。

また、子育て支援にも力を注ぎ、山々に囲まれた町の特色を活かし、大自然の中で子どもがのびのびと生活できる認定こども園『はぜる』を平成31年に設立しました。『はぜる』は移住者や地域住民が集い多世代交流できる子育て支援拠点施設としてつくられており、町外の人でも短期間子どもを預けることが可能な

『一時預かり』制度を設けていました。

しかしながら、移住体験住宅を利用される方は高齢の方が多く、また、そこから移住につながることもこれまでではなく、いかに若い世代に利用していただき、移住施策につなげていくかということが課題でもありました。

### 3 保育園留学誕生

そうした中、現在保育園留学を官民連携で進める株式会社キッチハイクとイベントを実施したことをきっかけに、令和3年6月に会社の代表である山本氏から『はぜる』の写真を見て「1歳の娘をはぜるに通わせることができませんか」と問い合わせのメールが届きました。山本氏は横浜市在住ということもあり、正式な入園は広域入所の手続きなど事務的に大変なこともあるため、一時預かり制度を利用し受け入れを行うこととしました。入居する住宅も移住体験住宅が空いていたことからそちらに決定。仕事もネット環境があればテレワークが可能ということだったので、移住体験住宅はWi-Fiも整備されていることから仕事ができる環境も整えることができました。山本氏は厚沢部町に来るや自ら「保育園留学しています！」と自身のSNSで厚沢部町での滞在の様子をアップしてくれました。そうしたところ、「楽しそう！」「こんな制度があるのですか」「新しいワーケーションの形ですね」といった反響が多数届きました。山本氏が滞在の間、役場の担当者と保育園留学やまちづくりについて話す機会が



保育園留学の舞台となる認定こども園『はぜる』



3歳未満児用の園庭（子どもの年齢に合わせた環境設定）

多く、滞在最終日には、山本氏から保育園留学を事業化する企画書をいただきました。企画書の中身は、今まさに山本氏が体験している『はぜる』での一時預かり制度の活用と移住体験住宅の利用（1週間～3週間）に加え、厚沢部町での生活体験（農作物の収穫体験など）をパッケージ化し『保育園留学』とすることで、わかりやすく、またインパクトを持った事業とすることができるのではという内容でした。山本氏の体験が『保育園留学第0号』として、保育園留学誕生の瞬間でもありました。

その後、事業化に向けて株式会社キッチハイクとの協議に加え、庁内での調整や『はぜる』の先生たちとの打ち合わせ、また、移住体験住宅の指定管理を行う素敵な過疎づくり株式会社との打ち合わせを重ね、令和3年10月に保育園留学の取組を全国にPRすることを目的にクラウドファンディングを実施。目標額30万円に対して支援者数105人から155万千円の支援をいただくことができました。（達成率517%）

また、保育園留学のポータルサイト作成も進め、クラウドファンディング終了と同時にポータルサイトにて令和3年11月から正式に保育園留学の募集を開始しました。令和3年11月から令和4年3月までの間に3組のご家族が保育園留学を体験してくれました。

#### 4 官民連携協定書を締結

令和4年4月からは、厚沢部町と株式会社キッチハイクによる『次の100年を創造する地域の家族と繋がりをつくる「保育園留学」事業』を推進するため官民連携による協定書を締結し、内閣府による地方創生推進交付金（現：デジタル田園都市国家構想交付金地方創生推進タイプ）を活用し事業を正式にスタートさせました。



地元の木材をふんだんに使用し木のぬくもりを感じられる園舎

#### 5 保育園留学の実績

令和3年の事業開始直後から、多くの問い合わせやメディアによる取材等もあったことから、令和4年度の申し込みを開始したところ一ヶ月の間に100件を超える申し込みがありました。その後も問い合わせと申し込みの件数は増え続け、結果的に令和4年度の利用実績は150件、利用者数526人（うち子ども園利用児童数208人）となり、問い合わせ件数は1,450件以上で、キャンセル待ちは2,000件を超えるほどになりました。

特徴的なのはリピート希望率の高さで、アンケートにより97%となっており、1年間に2回利用された家族が4組、3回利用された家族が2組いる状況です。また、アンケートにより、厚沢部町への移住に興味を持った割合が67%、さらには移住したいと思った割合が4%となっており、厚沢部町への移住について興味関心を示す割合が高くなっていると感じています。

また、特徴的な実績として、経済流入額があげられます。保育園留学費用以外にかかる経費としてアンケートを行っており、利用者1組あたり滞在期間中に約20万円の消費があることがわかっています。レンタカー費用なども含めているため、すべてが厚沢部町内に対しての経済効果とは言えない部分はありますが、それでも令和4年度で150組の利用件数が同様に消費したと仮定すれば、実に年間3,000万円の経済流入額が生まれていることとなります。

令和5年度の受け入れも同様に行っており、今年度は年度末までに140組の利用を想定しています。この満足度の高さは何かというと、『はぜる』による子育て環境の充実と情熱的な先生たちの存在がすごく大きいと感じています。保育園留学に来られる前は、建物や園庭などハード面に惹かれて来られる方が多いので



3歳以上児用の園庭（自然の中のびのびと遊ぶことができる環境）



すが、実際に来られて先生たちの子どもたちへの向き合う姿勢や、子どもだけではなく保護者も一緒に受け入れる姿勢に心打たれる保護者がすごく多いのではないかと思います。実際に利用された多くの保護者からは、「ハード面の素晴らしさはもちろんのこと、ソフト面が素晴らしい」という声を多数聞くと同時に、子どものために保育園留学をしたはずが、先生たちの子どもに向き合う姿勢から、「親としての子どもへの向き合い方を考えることができた」という声も聞かれています。また、キッズリー（保育アプリ）によりその日の子どもの様子を写真で見ることができ、子どもの楽しそうな様子が伝わり安心して子どもを預けられている充実感も相まって仕事の生産性が上がったという声も聞かれています。

## 6 子どもたちへの影響

子どもたちの影響を考えたとき、都会などから来られる子どもにフォーカスが当たり、広々とした園庭で走り回れることや、自然に触れ心豊かな体験ができることが、保育園留学の子どもにとって良い経験となります。しかし、それだけではなく、保育園留学を始めて在園児にとっても、刺激的な経験になっていることがわかりました。例えば、東京から来ること、飛行機で北海道に来ること、数十階のマンションに住んでいることなど、今の自分達とは全く違う環境の子どもと触れ合うことで、子どもたちの興味や好奇心が増しコミュニケーション能力の向上にもつながっています。

また、子どもたちが思う「厚沢部町の魅力」は、大人にとっては日常的な風景や出来事であっても、子どもたちにとってはそれが「厚沢部町の魅力」と捉えて

おり、先生に「〇〇が楽しいから保育園留学の子を連れていきたい！」などと話し、積極的に子どもたち自身が厚沢部町の魅力を伝える姿も見られています。また、保育園留学児が帰るときの涙のお別れと、次の週にはまた新たな出会いの喜びを幼少期から体験することは、心の成長にもつながっています。

年間通して全国各地さらには外国からも保育園留学に訪れる子どもたちがいることで、厚沢部町認定こども園にいる子どもたちは、この小さな町で世界を感じながら生きることができています。

## 7 新たに始まった取組

### ① 旅先納税（令和4年7月～）

保育園留学を進める中で事業の継続性をどのように持ち続けるかということは重要な課題になってきます。ふるさと納税を活用することは課題解決の一つの方法ではありますが、厚沢部町では、旅先で寄附を行うふるさと納税を株式会社ギフトと連携し導入しました。これは旅先でスマートフォンによりふるさと納税することで、その場でスマートフォンに旅先の加盟店で使用する事ができる電子クーポンが付与されるものです。寄附額は町の収入となる一方で、返礼品についても地元で使える電子クーポンのため、地元にお金が落ちる仕組みになります。そうすることで、事業の継続性が生まれると共に、町全体で経済の循環が生まれ、より保育園留学の推進につながるようになります。令和4年度では約200万円の寄附があり、令和5年度は1月現在で既に約550万円の寄附がなされており、保育園留学事業の継続性に大きな役割を果たしているものと言えます。



アスパラガスの収穫体験の様子



## ② キッズドクター（令和4年8月～）

保育園留学など慣れない土地に来ると、どうしても体調を悪くしてしまうお子さんもいます。そんな時に慣れない土地で慣れない病院へ行くのも大変です。しかも大きな病院へ行くとなると車で時間をかけて移動しなければなりません。そういった課題を解決するためにオンライン診療（キッズドクター）を導入しました。スマートフォンのアプリで利用することが可能であり、無料のチャット相談とオンライン診療があります。オンライン診療はビデオ通話で診療し処方箋が地元の薬局に出ることになります。キッズドクターは夜間及び休日等の利用に限られますが、夜間受診することで、翌日に地元の薬局へ薬を受け取りに行くことができます。また、このキッズドクターは保育園留学の子ども限定のサービスではなく、厚沢部町内の子どもも利用することができることから、過疎地における医療課題の解決の一つになるものと考えています。



## ③ ダイバーシティドア（令和5年7月～）

地域と子どもたちの多様性をひらくインストラクター登用プログラムとして、認定こども園にダイバーシティインストラクター（外国人英語講師）を常駐させる取組を開始しました。特徴としては、多様性の日常をつくる、子どもの未来をひらく、保育園の働き手・移住者増へ、国内外からの受け入れに、としており、ただ英語を教える英語講師ではなく、子どもたちに世界の多様性を導くようなこれからの時代のインストラクターとして、園内での子どもたちとの会話は全て英語で話すこととしており、日常から多言語・多文化に触れられる環境を創出しています。また、インストラクター自身が家族で厚沢部町へ移住しており、お子さ



ダイバーシティインストラクターの活動の様子

んが認定こども園に在園児として通園するなど、移住者増にもつながる取組となっています。

## ④ 保育園留学サミット（令和5年10月開催）

令和4年11月に株式会社キッチハイクが事務局となり、保育園留学に取り組む自治体や園、関係企業などが参画する「保育園留学コンソーシアム（会長：厚沢部町長）」を設立しています。令和5年10月には保育園留学コンソーシアムが主催する「保育園留学サミット」が東京都上野で開催され、当町からは会長である佐藤町長はじめ、政策推進課担当職員、認定こども園主任保育士が出席し、「保育園留学が変える、地域の未来」をテーマに内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局内閣審議官の西経子氏をモデレーターに、保育園留学がどのように始まりどのような課題に直面し、それをどのように乗り越えてきたか、また、事業を持続可能にするための工夫や事業に向き合う中での新たな取組やチャレンジについて、トークセッションを行いました。



保育園留学サミットの様子



## ⑤ おむかえテイクアウト（令和5年12月～）

この取組は、園児をこども園に迎えに行った際に、地元の食に関わる事業者が調理した夕飯の一品・総菜をテイクアウトできる仕組みとなっており、こども園の在園児・留学児の全ての保護者が利用することができ、保護者の家事の負担軽減により子育て支援の充実を図っています。利用者からは「はぜるのお迎えの時に受け取れるというのがとてもありがたいです」「自分では作らないようなメニューと安心安全な食材で作られているおむかえテイクアウトがあることに心から感謝しています」「すごく面白い試み。他町に住む友達に話したらとてもびっくりしていました」など、嬉しい意見が多数届いています。

## ⑥ 「保育園留学の寮」整備（令和6年3月完成予定）

保育園留学のキャンセル待ち解消、受入住宅の拡充、さらには移住定住に向けた取組として、株式会社キッチンハイクにより保育園留学専用の住宅を2戸整備しています。この住宅は、コンパクトなつくりになっており、子ども目線による洗面台の高さや、子どもがワクワクする屋根裏部屋、家の中が全て見渡せる間取りなど、キッズファーストによる設計となっています。また、保育園留学による2週間利用をベースにしつつ、移住を希望される方には最長で5年間、賃貸住宅として貸し出すことで、移住者としての受入住宅不足の課題解決も図る取組となっています。令和6年3月末に完成し6月からの稼働を予定しており、2週間利用の場合、2戸で年間44組が利用可能で既に24組の予約が入っている状況となっています。



「保育園留学の寮」完成イメージ

## 8 課題とこれからの保育園留学

この2年間取り組んできた保育園留学により、目的の一つである『超長期的な関係人口創出』に関しては、受入実績やリピート希望率の高さなどから、一定の効果が表れていると感じています。また、保育園留学から移住に興味を持ってくださる方も増えており、令和5年度には東京から1組、京都から1組のご家族が移住されています。一方、移住に関する問い合わせ・相談についても増えてきてはいるものの、入居できる賃貸住宅や空き家などが少なく、移住に結び付けられていないケースも一定数あります。「保育園留学の寮」整備が課題解決の取組の一つにはなりますが、関係人口から移住定住に向けた住宅の確保については、さらなる取組が必要と感じています。

それでも移住というのは簡単ではありません。たしかに保育園留学から移住してくださる家族がいることは町にとって大きなことですが、必ずしも『移住』が全ての解ではないとも思っています。保育園留学により年間通して利用家族がいることは、すなわち厚沢部町で人は変われど確実に生活している子育て家族がいることになります。住民票はなくとも、そこで生活することは町の活性化につながります。そうした家族が一組、二組と増えていくことで、直接的な移住者ではなくても、もはや移住と同じ意味をなす関係人口になるのではないかと考えます。

また、特に年長児として保育園留学に来られたご家族から「小学校でもこの取組をしてほしい」といった声が多数聞かれています。デュアルスクールや山村留学など様々な取組がある中で、保育園留学から小学校へと継続した関係人口を創出できる取組を、今後どのように展開していくことができるか、関係機関との協議を進めていきたいと考えます。

今後も全国のたくさんの方に『はぜる』での保育園留学を体験していただき、子育て環境の充実と厚沢部町との『超長期的な関係人口』を創出していきたいと思います。